

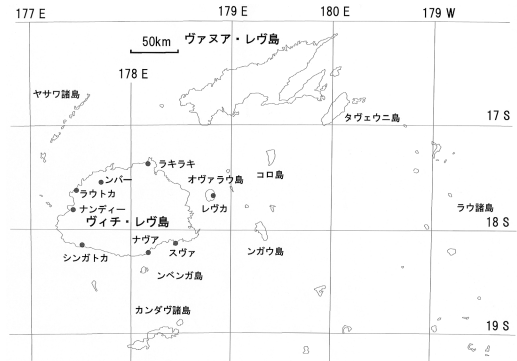
フィジー、ヴィチ・レヴ島のキーワードと景観*

島津 弘**

I はじめに

オセアニアは1つの大陸と多数の島嶼からなる地域である。しかし、中学校・高校の教科書の中で取り上げられているのはオーストラリアにほぼ限られている。その中においてフィジー（第1図）は、いくつかの教科書で取り上げられてきた。2008（平成20）年発行の現行の高校教科書のうち、二宮書店の「詳説 新地理B」、教育出版の「地理B 世界をみつめる」でやや詳しく取り上げられている。これらの教科書におけるフィジー、特にヴィチ・レヴ島に関する記述についてのキーワードを挙げてみると、気候分布と植生景観・土地利用、サンゴ礁、観光、農業とサトウキビ生産、民族および民族問題である。東京書籍発行の1997（平成9）年版の中学校の教科書では衣食住および伝統的生活の特徴とその変化が中心に据えられ、多くの写真が掲載されている。一方で、前述の高校教科書では図や写真などの可視的な資料が少なくイメージがつかみにくいといった難点がある。

2008（平成20）年7月に発表された「中学校学習指導要領解説」においては、「写真や映像資料などを用いて人々の生活の工夫や、伝統的生活と現代の変化をとらえるといった学習活動」が求められている。現在、さまざまな媒体で世界の風景を見ることができる。しかし、これらが十分に地理学的意味を持って撮影され、説明されることは少ないために、容易に教材化するこ



第1図 フィジーの島々

とはできない。

熱帯の山地河川に興味があった著者は「個人的に」2006年2月および2007年2月にフィジーを訪れ、ヴィチ・レヴ島および周辺の島で写真を撮影し、官製地形図や資料を収集した。本稿ではこれらを用いて、教科書で取り上げられているフィジーのキーワード、特に自然に関して紹介する。

II フィジーとヴィチ・レヴ島

フィジーは、南太平洋の南緯18度、東経178度に位置し、およそ330の島からなる国である（第1図）。その大半は無人の小さな島である。南太平洋のサンゴ礁の島というと、低島かつ小さな島を思い浮かべることが多いかと思われるが、フィジーの2つの大きな島、

[キーワード] 1 フィジー 2 ヴィチ・レヴ島 3 自然環境 4 景観 5 可視的資料

* 本稿は立正地理学会海外地理教材研究委員会シンポジウム「海外の景観を地理教材として活かすために」（立正地理学会，日本地理教育学会，お茶の水地理学会共催，2007年7月5日，立正大学大崎校舎）での発表を骨子として加筆修正したものである。

** 立正大学地球環境科学部



写真1 西の沖合から見たヴィチ・レヴ島
2007年2月20日撮影。

ヴィチ・レヴ島とヴァヌア・レヴ島はいずれも高島である。このうち、首都スヴァのあるヴィチ・レヴ島は10,388km² (Nunn, 1998) と四国の半分強の面積を持つ比較的大きな島である(二宮書店の教科書ではヴィチ・レヴ島が四国よりやや大きいと読み取れる記述がある)。最高高度はトマニイヴィ(英名ヴィクトリア山)の1,323mで、島の中心部には1000m級の山が並んでいる(写真1)。

Ⅲ ヴィチ・レヴ島の気候と植生景観

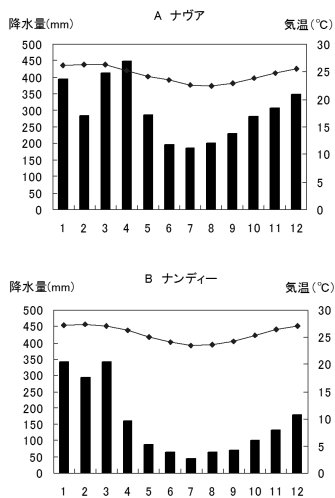
熱帯収束帯(ITCZ)と南東貿易風帯の支配下に入るため、ITCZが北上する7月を中心とする冬が乾期、南下する1月を中心とする夏が雨期である(写真2, 第2図)。ITCZが北上する冬でも南東貿易風の風上



写真2 ヴィチ・レヴ島にかかるスコールの雲
2007年2月20日撮影。

にあたるナヴァなど島の南東側では年降水量が3000mm程度と多く、一年を通して降水がある(第2図A)。一方、島の西側に位置する山地の風下側では降水量は少なく、年降水量は2000mm程度で、雨季と乾季の差が大きい(第2図B)。地図帳のケッペンの気候区分では島全体がAfと表現されているが、ナンディー(Nadi; アルファベット綴りから想定できる発音と異なる読みの地名にはアルファベットを併記)やンバー(Ba)など島の西側地域は数値的にはAmとなる。なお、島の中心部の降水量は特に多く、モナサヴ・ダム(Mana Savu Dam)の年降水量はおよそ5000mmである(Fiji Meteorological Service, 2009a)。

教科書では降水量の違いが草原、森林といった植生景観の違いとしてあらわれていると説明されている。



第2図 ナヴァとナンディーの雨温図

1971~2000年の平均値。Fiji Meteorological Service (2009a) から作成。

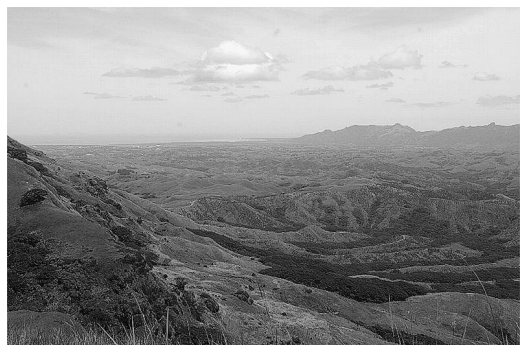


写真3 ヴィチ・レヴ島西側の草原地帯
尾根の高さに定高性がある。2007年2月21日撮影。



写真4 草原地帯の中にある植林地

草原地帯と植林地帯のコントラストが明瞭である。およそ1週間前の豪雨に起因すると考えられる崩壊地はわずかしか見られなかった。2007年2月21日撮影。

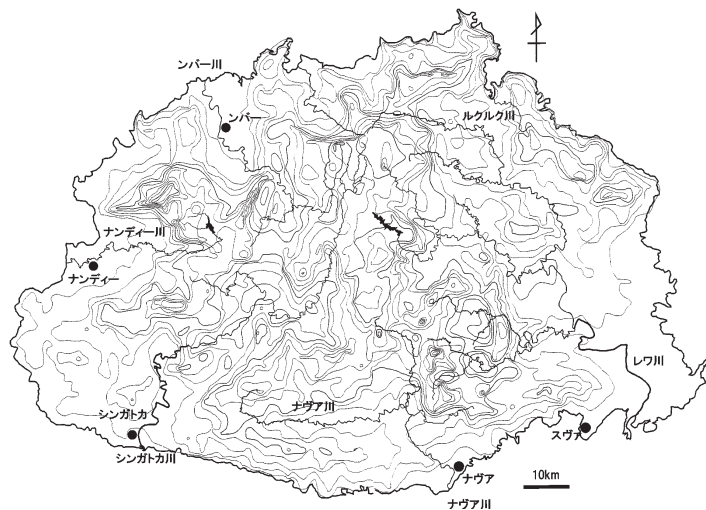
実際に島の西側のナンディーの周囲の山地には草原が広がっている(写真3)。かつては草原の成因に人為作用も考えられていたが、花粉分析などから人類到達以前から草原であったことが明らかにされている(Manner, 1999)。しかし、谷底は熱帯雨林に覆われ(写真3)、一部では植林された林が広がっている(写真4)。一方、島の南東側に広がる森林地帯は植林地帯である場合も多い。このように島の植生景観の違いは、降水量分布のほか、雨の降り方や風、局地的な水文

環境、人為的影響など複合的な要因が植物の更新特性に影響して形成されたと考えられ、単純ではない。

IV ヴィチ・レヴ島の地形

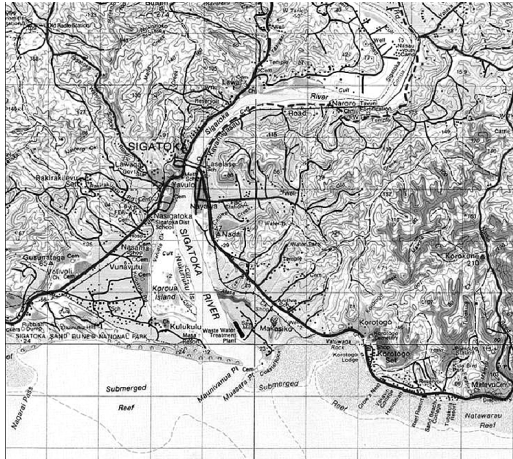
ヴィチ・レヴ島ではさまざまな地形を見ることができ、扇状地こそ見られないが、侵食小起伏面(写真3, 第3図)、崩壊地、山地河川、河成段丘(写真5)、デルタ、海岸砂丘(第4図; 1カ所のみで自然公園に指定されている)、海成段丘、サンゴ礁がある。ヴィチ・レヴ島の北西沖には、サンゴ礁をともなった小さな島や環礁が点々と連なっている。

二宮書店の教科書には「火山が南北にのび」という記述が出てくるが、ヴィチ・レヴ島における最新の火山活動が起こったのは300万年前である(Nunn, 1998)。600万年前ごろヴィチ・レヴ島にあった火山フロントは、プレートの沈み込み帯の移動にともなって段階的に南方に移り、300万年前以降の火山活動は現在のプレート境界に近いカンダヴ諸島で見られる(Nunn, 1998)。ただし、ここでも噴火の歴史記録は



第3図 ヴィチ・レヴ島の接峰面図

5万分の1地形図より作成。等高線間隔は100m。



第4図 シンガトカ (Sigatoka) 周辺の5万分の1地形図
地図の左下の海岸沿いに砂丘が見られる。地形図中のグリッドは1kmの正方形。

ない。ヴィチ・レヴ島は始新世以降のおよそ5000万年間に噴出した火山岩 (Gill, 1987) と、その後に海底で形成された堆積岩によってできた島で、火山体そのものは見られない。

接峰面図 (第3図) にもあらわれるように、侵食小起伏面と思われる定高性のある尾根や平坦な地形が広がっており (写真3)、それらを刻んで河川が形成されている。海岸近くまで比較的標高が高く、南海岸へ流入するナヴァア川などの河川では下流部に深い谷が形成されている。

熱帯の河川という、浮流物質で濁っており、河床・河岸には細粒物質が堆積しているという印象をもっているのではないだろうか。しかし、フィジーの河川には、蛇行州や交互砂礫堆が発達し、日本の河川中流域と似たような大礫～巨礫が堆積した河原が見られる (写真6)。ヴィチ・レヴ島の中心部に源流を持つナヴァア川やンパー川などいくつかの河川は、同様に砂礫堆が発達している。山地内部の溪流も日本の溪流と同様に巨大な礫が谷底を埋めている。

ヴィチ・レヴ島では、部分的に風化が深くまで達しているものの、硬い岩盤も地表に見られること、流域



写真5 シンガトカ川の河岸段丘
段丘面上は畑地となっている。2006年2月12日撮影。



写真6 シンガトカ川の砂礫堆
2006年2月12日撮影。

には急峻な斜面が広く分布していること、流下距離は最長のレウ川でも162kmで、埼玉の荒川ほどしかないことなどの理由で、礫が生産・運搬され、かなり下流まで到達すると考えられる。日本の河川と異なるのは、河床勾配が1%以下とかなり緩やかであるにもかかわらず、巨礫が堆積していること、マトリクスが粗砂～中砂ではなく、細砂～粘土であることである。

フィジーに2回目に訪れた2007年には、そのおよそ1週間前の豪雨でヴィチ・レヴ島西側の河川はかなり増水し、ナンディー市街地では大規模な氾濫が生じた (写真7)。また、河床には大量の細粒堆積物が堆積していた。しかし、斜面上では新たな崩壊地はあまり見られず (写真4)、崩壊で生産された細粒土砂が直接流下したとは考えられない。谷底に蓄積していた土砂が流出した可能性がある。



写真7 ナンディー中心街にある写真店のショーウィンドーに飾られていた2007. 2. 12の水害の写真
人の腰まで濁水が流れ込んだ。2007年2月19日撮影。

2009年1月9日から12日にかけて、熱帯低気圧性の豪雨による水害が発生した (Fiji Meteorological Service, 2009b)。7日～10日のナンディーにおける総降水量は723mm、10日には24時間で281mmの降雨があった (Fiji Meteorological Service, 2009c)。島の中心部のモナサヴ・ダムでもこの期間に816mm、10日に386mmの降雨があったため、島の西側の主要な河川であるナンディー川、ンバー川、シンガトカ川では激しい洪水に見舞われるとともに、橋の流失、氾濫が生じ、ナンディーやンバーの市街地は大きな被害を受けた (Fiji Meteorological Service, 2009b)。この期間の島の東側における降水量は300mm以下で、大きな被害は生じていない。2007年の豪雨でも、ナヴァ川などでは大きな増水の跡は見られず、集中豪雨の起り方も島の東西で異なっているようである。

2007年以前の水害としては、1993年、1997年の水害がある。道路建設、森林伐採や土地利用変化が洪水の頻度増加に影響している可能性も指摘されている (Nunn, 1999)。

V フィジーに暮らす人々の顔

フィジー人はフィジーの人口の約半数を占めるに過ぎない。残りの多くは19世紀末～20世紀初頭にサトウ



写真8 フィジー系の人々

左：陶器生産集落の女性 (2006年2月13日撮影)、
右：リゾート島で出迎えるスタッフ (2007年2月20日撮影)



写真9 インド系の人々

左：ツアー会社の運転手 (2007年2月21日撮影)、
右：スヴァの街の女性 (2006年2月13日撮影)

キビ栽培労働者として連れてこられ、その後定住したインド人である。それぞれの人は見た目だけでなく、習慣、気質、宗教などの点で大きく異なっている。さらにフィジーには、観光をはじめ、外資系企業の白人、そして商売上手な中国人が加わり独特の「不安定な」フィジー社会をつくり出している。この「不安定な」状況を小説化した垣根涼介の『真夏の島に咲く花は』(講談社)はフィジーを理解する上で一読の価値がある。

フィジーの都市(首都のスヴァ、リゾート都市のナンディ)では、フィジー人(写真8)、インド人(写真9)、中国人、白人とさまざまな人が行き交う。しかし、都市にあってもフィジー人とインド人では出会う場面が違う。インド人は小売商店で、あるいは観光業の使用者として、フィジー人はフィジーらしさを必要とする観光の場面、あるいは被雇用者として見かけるのである。もちろん、観光向けではない商店や市場では双方が買い物をしている(写真10)。

都市の一部を除いて、フィジー人とインド人では居

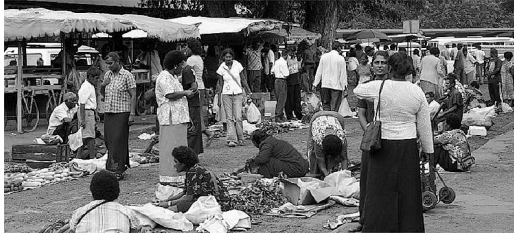


写真10 ナンディーの市場

フィジー系、インド系の人々がそれぞれ店を出し、また買い物をしている。2007年2月19日撮影。



写真11 山間地にあるフィジー人集落

2007年2月21日撮影。

住形態も異なっている。フィジー人は島全体にほぼまんべんなく点在しているフィジー人集落で集住しているのに対して（写真11）、インド人は集落をつくらず、各家は中～低標高域に点在している（写真12）。フィジー人集落は外周がはっきりしており、その中に集落外の人立ちは立ち入ることはできない。立ち入るときには儀式が存在するが、いくつかの観光集落ではその儀式を体験することができる。

この共同体の考え方は、フィジーにおけるさまざまな場面で体感できる。従業員の多くがフィジー人である観光ホテルにおいては、時間になってもあらわれない（「フィジー時間」とよばれる）、部屋の机の上に置いたものがなくなるということがある。フィジー人共同体では、必要が生じて号令がかかって集まるとき以外は自由に時間を過ごし、また村のものは共同で使うので個人所有の概念は希薄である。これが、時間にルーズ、置いてあるものを持って行ってしまうということ



写真12 サトウキビ畑の中のインド人の住居

2007年2月21日撮影。

につながっている。これらのことはフィジーに着いたときに旅行会社で説明を受ける注意点の2つである。

VI おわりに

本稿では高校教科書でフィジーのキーワードとなっているいくつかの事象について写真を中心として紹介した。生活文化や民族問題についてはほとんど紹介できなかったが、本稿により南太平洋の国に興味を持って頂ければ幸いである。

旧英領のフィジーでは自動車は左側通行で、新車・中古車を問わず日本から輸入された自動車が多いことから、道路の風景だけを見ると日本とはかなり似ている。ある意味、日本との近さを感じる。一方で、実際には距離的に遠いことから、日本からの観光客は多くない。乗客数の伸び悩みから2009年3月をもってエア・パシフィックが成田－ナンディー直行便を廃止する。南太平洋の国々への入口となっているフィジーに日本からの直行便が飛ばなくなることは、南太平洋のツバルなどと日本との距離が広がってしまうことを意味する。とても残念である。

（受付2009年1月21日）

（受理2009年2月18日）

文 献

Fiji Meteorological Service (2009a) : Monthly averages for selected sites in the Fiji Islands.

<http://www.met.gov.fj/documents/Normals1185831382.pdf>
(最終閲覧日 : 2009年1月16日)

Fiji Meteorological Service (2009b) : Nadi flood images.

http://www.met.gov.fj/images/flood/Nadi_Flood.pdf (最終閲覧日 : 2009年1月16日)

Fiji Meteorological Service (2009c) : Preliminary rainfall data for month 1, 2009.

<http://www.met.gov.fj/documents/qcrain1231989705.pdf>

(最終閲覧日 : 2009年1月16日)

Gill, J. B. (1978) : Early geochemical evolution of an oceanic island arc and backarc: Fiji and the South Fiji Basin. *Jour. Geol.*, **95**, 589-615.

Manner, H. I. (1999) : Terrestrial Ecosystem. Rapaport, M. ed. "*The Pacific Islands. Environment & society*" The Bess Press, Honolulu, 93-108.

Nunn, P. D. (1998) : *Pacific Island landscape*. Inst. Pacific Studies, The Univ. of the South Pacific, 318p.

Nunn, P. D. (1999) : Geomorphology. Rapaport, M. ed. "*The Pacific Islands. Environment & society*" The Bess Press, Honolulu, 43-53.

Keywords and Landscapes of Viti Levu Island, Fiji

Hiroshi SHIMAZU*

[keywords] 1 Fiji 2 Viti Levu Island 3 natural environment 4 landscape 5 visual material

*Rissho University